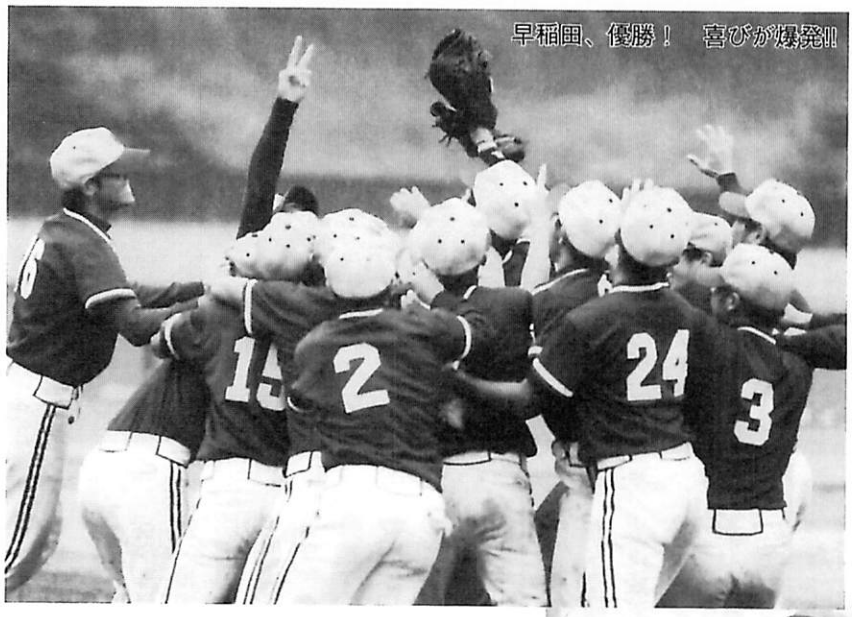
第40回全日本大学男子選手権大会

早稲田大（東京）、悲願の初優勝！


早稲田、優勝！　喜びが爆発!!

準優勝の国際武道大

標記大会は、9月2日（金）に監督・主将会議、審判員・記録員会議、開会式が行われ、翌3日（土）から男女同時に試合がスタートした。

大会初日と2日目は、9月とはいえ真夏の暑さが続いた。しかし、最終日の5日（月）は台風14号の影響をモロに受け、激しい降雨の中での試合となってしまった。

ベスト4には、日本代表の好投手・中島を擁する早稲田大（東京）。エース・小田澤㈹を中心に、連覇を狙う国士舘大（東京）。チーム打率3割を超える打線の活躍で勝ち進んだ東海大（神奈川）。チーム一丸となった戦いで快進撃を見せる国際武道大（千葉）の4校が準決勝で激突した。

大会最終日、9時からの試合開始に間に合わせるべく、早朝から万が一に備え、予備球場も含めたグラウンド整備を行い、激しい雨の中、準決勝がプレイボール。関係者の熱意が通じたか、中断を挟みながらも3時間を費やして準決勝が終了。関係者総出のグラウンド整備で決勝の舞台を整え、全日程を無事終了することができた。

平成17年9月3日（土）～5日（月）
群馬県安中市／西毛総合運動公園他

日ソ協記録委員　深澤　禧昌

〈準決勝〉

早稲田大	0000025	7
国士舘大	0000010	1

（早）○中島―橘内
（国）●小田澤㈹―河合
▽三萬野（早）三能條（国）
（審）P高田　1川村　2神田　3篠原
（記）日出山

激しい雨の中、早稲田・中島、国士舘・小田澤㈹の両投手が好投。息詰まる投手戦を展開し、両チーム無得点のまま、試合は終盤を迎えた。

早稲田は6回表、この回先頭の1番・新井が二・遊間安打。2番・萬野が手堅く送り、2つの暴投で待望の先取点とさらに3番・吉形の捕前内野安打。四球、暴投で一死二・三塁とし、5番・構の三塁強襲安打でこの回2点を挙げた。

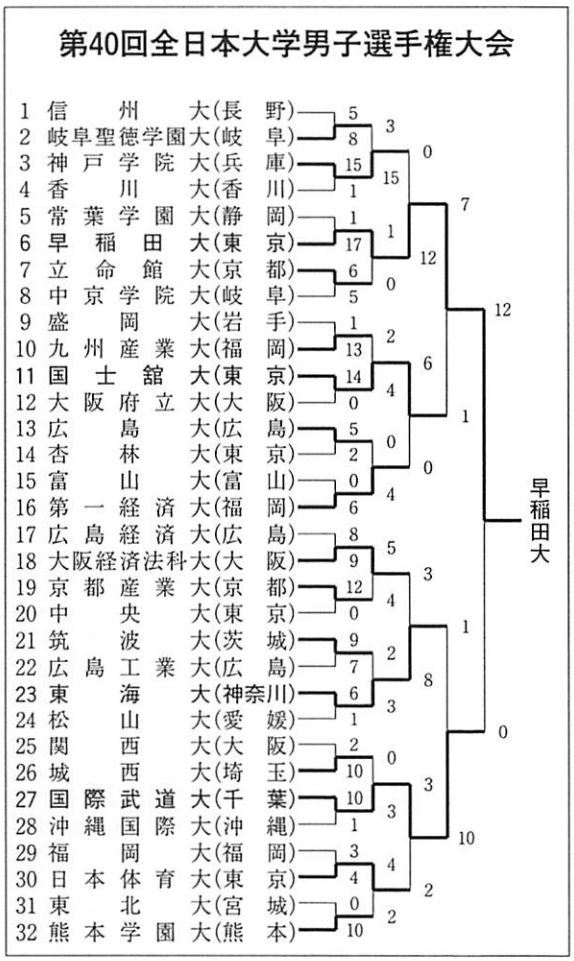
国士舘はその裏、二死三塁から4番・浦本の二・遊間を破る適時打で1点を返したが反撃もここまで。頼みのエース小田澤㈹が最終回に制球を乱し、

四球で走者をため、走者一掃の三塁打を浴びるなど大量5点を奪われ、勝負は決した。

早稲田・中島は毎回の15奪三振。国士舘の連覇の夢を打ち砕き、初の決勝進出を果たした。

中島の剛腕が国士舘の連覇を止めた！

第40回全日本大学男子選手権大会



〈準決勝〉

東海大

	0 0 1 0 0 0 0	1
	0 1 0 3 1 5 x	10

国際武道大

（東）●大黒―石井
（国）○平山―土居
▽本伊芸(将)、市原（国）
三熊木②（東）岸本②、土居（国）
〔審〕P阿部 1隅谷 2須藤 3清水
〔記〕江口

1―1の同点で迎えた4回裏、国際武道は4番・伊芸(将)、5番・市原の連続本塁打などで3点を勝ち越した。5回裏には9番・岸本、1番・宇佐美の長短打で1点を追加。6回裏には打者10人を送る猛攻で5点を加え、勝利を決定づけた。

守っては、左腕・平山が4回表、左肩に直撃打を受けるアクシデントがあったが、毎回の13奪三振の力投で完投勝利を収め、初の決勝進出を決めた。

敗れたとはいえ、東海大は12名の選手で準決勝進出。その戦いは見事なものであった。

《決勝》

早稲田大

	0 2 0 9 0 0 1	12
	0 0 0 0 0 0 0	0

国際武道大

（早）○中島―橘内
（国）●山本・平山―岸本
▽三吉村（早）三青山（早）
〔審〕P生方 1向田 2小林 3斎藤
〔記〕秋山

早稲田は2回表、振り逃げと敵失で一死一・二塁とし、7番・青山の左前安打に敵失が絡み、2点を先制した。4回表には打者13人を送る猛攻。早いカウントから積極的に打ちに出て、5連打を含む長短8安打を集中。大量9点をもぎとり、大勢が決した。

投げては、エース・中島投手が毎回の10奪三振。最後まで国際武道に得点を許さず、見事な完封で初優勝に花を添えた。

早稲田優勝の立役者は、何と言ってもこの中島。5連続完投が光り、その投球内容も防御率0・42、奪三振58（9・10・14・15・10）、被安打13（2・2・4・3・2）とほぼ完璧に抑え、打っては「4番」と、チームの大黒柱としての活躍は見事の一言に尽きる。また、打線もこれに応え、5番・構、6番・日暮両選手が打率5割のハイアベレージを残し、3番・吉形、9番・吉村両選手も4割と、切れ目のない打線が効果的に援護。悲願の初優勝を手にした。

4試合を無失策。全チームトップのチーム打率と長打力を誇り、さらに多彩な投手陣が揃った国士舘。数字の上では、なぜ連覇に手が届かなかったのか疑問が残る。

勝負の見えた試合であっても、最後まで決して手を緩めなかった早稲田。伝統ある応援団の声援が、チームの実力以上のものを引き出し、他校にとっては脅威と感じたのではないだろうか。

早稲田応援団のともに戦った相手校へのエールは、点差とは関係なくすべての人々に力と爽やかさをを与え、小雨の降る中で行われた表彰式・閉会式を鮮やかに彩り、40年という節目の大会にふさわしいエンディングを演出した。